

## 『嫉妬の金環』太田さんとの仕事 山田 せつ子

太田さんと舞台の仕事をしたのは、5回ほどだった。その中でもっとも印象深いのは、芸術監督を務めておられた湘南台市民ホールでの『嫉妬の金環』、4名の女性ダンサーのソロダンス競演だった。舞台上直径7メートルの円形の水盤に水が満たされ、水盤の縁15センチぐらいが金色に塗られていた。タイトルと美術だけが太田さんの提案だった。リハーサルで、はじめて水盤に足を入れて驚愕した。足首まで浸かる水は、不用意に動けば、ピチャピチャと雑音を立て続ける。それは、神経の声のようにも聴こえた。肝を据えて水にむかう。金色の縁が結界のようにからだに向かってきた。それから10年を過ぎて、春秋座の舞台上、太田さんの美術コンセプトで『門・gate』を踊った。低く静かに唸りながら回る盆の上に、四角い巨大なオブジェが建っていた。盆をまわしてどの角度でも選んで踊れる状態だった。

太田さんは静かに、しかし確実に挑戦的だった。ダイナミックに繊細に。それは、挑発的だったとも言えるぐらいに。

さて、この遺言をどうしようか。

太田さんの匂いを嗅いだ若い人達が面白いことをしてくれるのを待とう。

(ダンサー・コレオグラファー・京都造形芸術大学舞台芸術研究センター主任研究員)

## 〈読む〉ことの背理と実践 八角 聡仁

太田省吾を〈読む〉？ だがわれわれの前に遺されたテキストが、戯曲であれ評論であれエッセイであれ、容易に読み得ない言葉から成っていることはひとまず誰の目にも明らかだろう。読み解かれ理解されるべきものへの収束を強いる〈支配的言語〉の機制と闘うこと、そこに穴を穿つこと。それが〈表現〉する者として太田省吾が自らに課した基本的な倫理にほかならなかった。では、社会に対する屈伏としての〈理解〉も、意味による支配としての〈解釈〉も拒もうとする言葉をどのようにして〈読む〉ことができるのか——。たとえば能のテキストと劇形式に何を〈読む〉ことで『小町風伝』が生まれたかを思い出してみればよい。能動的な働きかけを限りなく抑制し、あるいはむしろそれを奪われ尽くした場に佇みつつ、〈受動〉の力において〈読む〉こと、すなわち〈読む〉のではなく、自らが〈読まれる〉という経験を通して〈沈黙〉は初めて真の〈劇的言語〉として生じたのではなかったか。晩年の用語に寄り添うなら、〈主語〉となることを放棄し、〈述語〉の織りなす世界の運動へと自身を差し出すことによって、〈文盲〉だけが〈読む〉ことのできる地平が開かれる。もちろん、それは論理的思考の水準では端的に矛盾を孕むほかない。しかし、まさにその背理を実践的に生きることこそ太田省吾は演劇の〈未来〉を、そして〈希望〉を託していたはずである。

(批評家・近畿大学文芸学部教授)

### 劇場実験公開日時

2017年2月18日(土) 13:00 (受付開始は30分前)

会場 京都芸術劇場 studio21 (京都造形芸術大学内)

料金 1000円 (予約優先制)

特設サイト：<http://ohtakyoten.jimdo.com/>

【予約方法】2016年12月5日(月) 10:00より予約開始

ウェブ：上記特設サイト内の予約フォームよりご予約ください。

メール：[ohta.kyoten@gmail.com](mailto:ohta.kyoten@gmail.com) (お名前、人数、電話番号をご明記ください)

京都芸術劇場チケットセンター (平日10:00-17:00)

電話：075-791-8240

窓口：京都芸術劇場チケットセンター (京都造形芸術大学内)

【問合せ】

京都造形芸術大学 共同利用・共同研究拠点事務局 (舞台芸術研究センター内)

電話：075-791-9144 (平日10:00-17:00)

メール：[ohta.kyoten@gmail.com](mailto:ohta.kyoten@gmail.com)

【演出】相模友士郎 村川拓也 和田ながら

【スタッフ】舞台監督 濱田真輝 (GEKKEN staff room)

照明 藤原康弘

音響 甲田徹

制作 竹宮華美 (舞台芸術研究センター) 豊山佳美

協力 浜村修司 (GEKKEN staff room)

主催：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

文部科学省 共同利用・共同研究拠点〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉

京都芸術センター制作支援事業

▼アクセス 京都芸術劇場 studio21

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内



●市バス3・5・204系統「上終町京都造形芸大前」下車すぐ

●叡山電鉄「茶山」駅より徒歩約10分

※駐車場はございませんので、お車・バイクでのご来場はご遠慮下さい

AD デザイン：倉本修/山田聖士 組版：山響堂pro.

# 劇場実験 太田省吾を〈読む〉

「未来」の上演のために

演出家・劇作家の太田省吾の  
「テキスト」や「言葉」を手がかりに  
若手演出家3名それぞれが劇場実験として  
上演を行うプロジェクト

# 2017 2/18 (土) 13:00

京都芸術劇場 studio21

## このプロジェクトについて

演出家・劇作家の太田省吾は、独自の言語観、身体論をもとにした「沈黙劇」を世に問い、後続作家や他ジャンルの芸術家に大きな影響を与えた。近年、彼の作品は、韓国、インドなどでも新演出が試みられ、日本でも若手演出家が上演を行っている。この研究プロジェクトでは、こうした動向を踏まえつつ、幅広い視点から、その演劇的可能性の検証を試みようとする。

2016年度は、京都を拠点に活躍する若手演出家3人と共同プロジェクトを組む。太田氏自身が立ちあげた京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科の卒業生でもある彼らが、それぞれの視点を通して、太田省吾の「テキスト」の「読み直し」を行い、劇場実験の公開を行っていく。こうした作業の積み重ねの向こうに、時代の不確実性に流されることなく、「未来の演劇」の形を探っていきたい。

文責：森山直人（京都造形芸術大学舞台芸術学科教授・演劇批評家）

【劇場実験期間】2017年2月14日（火）～18日（土）

【研究会 参加者】

研究代表者 森山直人

共同研究者 山田せつ子 相模友士郎 村川拓也 和田ながら

研究協力者 八角聡仁 新里直之 長澤慶太

※劇場実験公開のプロセスや、詳しい情報は特設ウェブサイトにて随時お知らせいたします。特設ウェブサイト：<http://ohtakyoten.jimdo.com/>

【舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点】

京都造形芸術大学・舞台芸術研究センターが母体となり、文部科学省「共同利用共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。

このプロジェクトは本拠点の研究プロジェクトの一環として行われます。

公式ウェブサイト：[www.k-pac.org/kyoten/](http://www.k-pac.org/kyoten/)

## 太田省吾プロフィール

太田省吾（おおた・しょうご）

1939年、中国済南市に生まれる。1970年より1988年まで転形劇場を主宰。

1978年『小町風伝』で岸田國士戯曲賞を受賞。1960年代という喧騒の時代に演劇活動を開始しながら、一切の台詞を排除した「沈黙劇」という独自のスタイルを確立する。代表作『水の駅』は沈黙劇三部作と称され、現在でも世界各地で作品が上演されている。また、『飛翔と懸垂』（1975年）、『裸形の劇場』（1980年）など、数々の演出論、エッセイを著している。

転形劇場の解散後は、藤沢市湘南台文化センター市民シアター芸術監督、近畿大学文芸学部芸術学科教授を経て、2000年の京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科開設や、続く2001年の同学舞台芸術研究センターの開設に深く関わり、日本現代演劇の環境整備に力を注いだ。2007年、67歳で逝去。

## 演出家プロフィール



### 相模 友士郎（さがみ・ゆうじろう）

1982年福井生まれ。演出家。2009年に伊丹に住む70歳以上の市民との共同制作舞台『DRAMATHOLOGY』を発表し、翌年フェスティバル／トーカー10に正式招聘される。2012年にダンス作品『天使論』を発表。各地で再演し、TPAM in YOKOHAMA 2015では国際コラボレーション作品として上演。その他の作品に『それはかつてあった』（2013）、『ナビゲーションズ』（2014）、『スーパーインポーズ』（2016）など。様々なコミュニティの中に入り込み、そこにいる人々と共同しながら、見るという身体的経験を問い直すような舞台作品を発表している。



### 村川 拓也（むらかわ・たくや）

1982年生まれ。演出家・映像作家。ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を演劇、映像の分野で発表している。虚構と現実の境界に生まれる村川の作品は、表現の方法論を問い直すだけでなく、現実世界での生のリアリティとは何かを模索する。主な作品に『ツァイトゲーバー』、ドキュメンタリー映画『沖へ』など。『ツァイトゲーバー』は各地で再演され、2014年にはHAU Hebbel am Ufer（ベルリン）にて上演。また、2015年に韓国・光州Asia Culture Center-Theaterにて滞在制作を行う。セゾン文化財団助成対象アーティスト。



### 和田 ながら（わだ・ながら）

京都造形芸術大学芸術学部映像・舞台芸術学科卒業、同大学院芸術研究科修士課程修了。2011年2月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。日常的な視力では見逃し続けてしまう膨大な細部を言葉と身体で接写するような作品を制作。主な作品に『はだあし』（2011年）、『わたしのある日』（2015年）、『文字移植』（2016年）など。2015年、FFAC創作コンペティション「一つの戯曲からの創作をとおして語ろう」vol.5最優秀作品賞受賞。したためは2015年よりアトリエ劇研創造サポートカンパニー。

## 演出家3人への質問 Question

**Q.** 太田省吾は舞台芸術や文学の諸ジャンルはもとより、美術、音楽、映像、建築などの分野にも幅広く深い関心を寄せています。一方、自らの創作活動との関連を念頭におきつつ、〈芸術から芸術をつくってはならない〉というエリック・サティの言葉を〈生きている場所からはじめよ〉と読み替えてもいます。こうした領域横断的な感受性、実践的な生の場へのまなざしと深くかかわる太田の仕事に対して、どのようなアプローチを考えていますか？

新里 直之

（近畿大学大学院総合文化研究科 修士課程／修士論文テーマ：太田省吾論）

### A. 相模 友士郎

「あなたを生きる」という事に今、関心があります。二人称を生きるという事が演劇をはじめ、芸術諸ジャンルの基本的な態度だと仮定した時に、上演という時間と空間は常に二人称的な出来事が起きうる特異な場であるはずですが、「わたし」が生きてあるという事実が「あなた」を生きる事によって全うできる事があるのならば、そこに演劇の可能性を改めて見出してみたい。それが太田省吾という作家に対するアプローチとどの様に接近するかはまだ未知数ですが、まずはそこから始めたいと思います。

### A. 村川 拓也

太田省吾の残した作家としての仕事（戯曲、演劇論、エッセイなど）を自分なりにまたは現代と照らし合わせて再解釈、読み替え、変換をするつもりはありません。ただ、太田省吾が世界に対峙するために持っていた視点が重要で、その視点に多く共感するところがあります。だから今回私は、その視点を彼の所持していたカメラだというふうに理解して、そのカメラを拝借して、覗き込むようにして上演作品を作ってみようと思っています。彼のカメラはフレームが普通のカメラより広いような感じがします。フレームが広いという事はそこに人間がいるとしても、その背後に広がる風景や大きな空間が否応無く写り込むわけで、「この人」とか「この物」とか言っても、広大なフレームの中ではただのひとつの構成要素にしかありません。取捨選択して限定していくのが舞台上での出来事だとすれば、彼のカメラは結果的にそれをあざ笑うスケール感を生み出すのだと思います。また、太田省吾のカメラは、太田省吾を題材に研究や作品やなにかをやるうする人々に対しても同じように、そのスケール感でもってその人々を残酷にあざ笑おうとするでしょう。人々の中にはもちろん私もいます。太田省吾自身もそこにいたのでしょうか。たぶんいたと思います。いま、彼のカメラだけが所有者不明のまま人々の外部に残されているような気がします。そんな事は私の妄想かもしれませんが、作り手自身もろとも飲み込もうとする太田省吾のカメラ（視点）を、覚悟の上で手にする事を選択します。

### A. 和田 ながら

わたしにとって、太田省吾という人物は、もっぱら「言葉」だ。2006年に京都に来たわたしは、ほんのひととき太田省吾の講義を受けただけで、じかに関わりを持つことはほとんどできなかった。大きな遅刻をしておしてしまったのではないかと落ち込み、そしてそれからのわたしは、太田省吾の言葉をずっとたどりつづけているように思う。この遅刻を巻き返すためのほとんど唯一の手立てとして、残っている言葉を読んでいる。

太田省吾の言葉は、答という形になってしまうのをぎりぎりまでこらえる、問うことそのものの運動の軌跡の記録で、それをたどるもの自らのふるまいをかえりみさせる。驚くべきことに、繰り返し繰り返し読んでもまったく近道ができない。むしろ、近道という発想を喪失してしまう体験をその都度やりなおすことになる。

この研究会でわたしは、太田省吾の書いた台詞を、声に出したいと思っている。ある場面においては、書かれながらもついには声にしなないという苛烈な選択さえありえた太田省吾の「台詞」に、わたしは憧れと同時に、憧れとおそらくは同量の、こらえがたい恥ずかしさをおぼえることがある。この恥ずかしさを、迂回もせず、抜け道を探ることもなく、それでなおどんな声がありうるか、どんな声であれば人間の「裸形」を本気で問えるのか考えることを、一歩目としたい。わたしの遅刻を繰り返すための。